



◆ ランカスター通信 ◆

—英語教育の鎖国—

投野 由紀夫

この原稿を書く直前にポーランドで言語コーパスとその応用に関する学会があって参加してきた。そこで、ふと考えたことを書いてみたい。話題の中心は、日本の英語教育界の一種の閉鎖性のようなことについてである。ポーランドはご存知のようにあまり豊かな国ではない。ワルシャワ国際空港もごくごく小さいし、民主化したと言ってもまだ国民は経済的には大変そうだ。ワルシャワからバスで2時間ほど離れたLodz(ポーランドの特別な綴りで「ウッジ」と読む)という町で学会は開かれたのだが、町はどの建物も古くてぼろぼろだし、はっきり言って日本だったらこんなところに学会を誘致なんか絶対しないだろうと思われるようなさびれた場所であった。

しかし、その学会には言語コーパス関連のそうそうたるメンバーが集まっていた。また、ウッジ大学では英文科の中でBritish National Corpusという1億語の英語コーパスをひな形にしたPolish National Corpus、学習者英語を収集したPolish English Learner Corpusを開発中で、それを中心に辞書編纂、文法書の開発、言語理論・言語教育への応用といった広範囲のプロジェクトが動いていて、ポーランドに入学して会場に到着するまでのイメージとのギャップに愕然とした。British Councilがお金を出していることも一部あるかもしれないが、これほどまでの学会をあの設備や環境で堂々とやってのけるポーランドの学者の一種の「根性」を感じたのである。

日本では科学技術関連の国際会議は非常に多いし、海外へもどんどん研究発表に行っている。私が会った学者の中でも自然言語処理系の方の中には英語も非常にうまく、場数を踏んでいるなあと感じる方も多い。しかし、逆に英語教育とか英語学・英米文学をやっている人の中に、内向きなイメージを感じるのは私だけだろうか？ 別に日本が劣っているとは全然思わない。恩師の中にも英文法の江川泰一郎先生や言語学の梶田優先生などはそのへんの欧米の学者なんかどうでもいいくら

いすごいし、私の専門分野である日本の学習英和辞典などは世界に冠たるすばらしいレベルである。だから、もっと世界の学者が日本に来てほしいし、日本のいいものをもっと宣伝し、知ってもらいたいし、交流があってほしい。JALTなどそういう意味では良い場所なのだろうが、日本人とのcollaborationは徐々に少なくなっている気がする。

ポーランド人はまったく英語に対するコンプレックスがない。彼らは見た目もあまり変わらないが、英語も抜群にうまい。しかし、ポーランドだって環境的にはEFLなのである。ただ大学から大学院生にかけての英語教育がどうなっているのかわからないけれども、上級者の割合が日本よりも格段に高いと感じた。理由を聞いてみると夏休みなどにアルバイトがたら英語圏へ出かける学生が非常に多いらしい。

この夏の国際応用言語学会(AILA)はそういった意味では記念碑的な行事なのかもしれない。事務局のご苦勞はいかばかりかと思うけれども、この機会に日本の研究者が是非堂々と彼らを迎えて、自分達の研究成果を発表してほしい。場所を提供しただけで、日本人は隅の方でこそこそしているというふうにならないでほしい。

えらそうに書いてきたが、私自身ポーランドの学会で発表し一線級の研究者と歓談する中で時々、自分が内側を向いているのかなあと感じる瞬間もあった。疲れて一人で部屋でぼーっとしていたこともあった。日本人の心の鎖国をとくにはひよっとすると時間がかかるかもしれない。でも、ice-breakingは確実にやって来つつある。